



托鉢修道会の説教活動からみる中世ヨーロッパ

人文科学系・人文社会学領域

木村 容子

准教授 KIMURA Yoko

博士(文学)(大阪市立大学)

■研究キーワード 西洋史 / 社会史 / 宗教史 / 文化史

■主な所属学会 International Medieval Sermon Studies Society, 地中海学会, 西洋中世学会, イタリア学会, 西洋史学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.4829e4784ebb972e520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

中世ヨーロッパの歴史は、キリスト教会と世俗社会との密接な関わりの中から生まれました。専門教育を受けた托鉢修道会の説教師たちはヨーロッパ各地で組織的に説教を実施し、それは「活版印刷以前のマス・メディア」として機能しました。説教を検討することで、中世ヨーロッパにおいて思想が現実社会を変えていく、あるいは現実との交渉のなかで思想自体が変容していく、そうした複雑な過程を明らかにすることができるのです。そのような可能性をもつ説教に注目して、ヨーロッパの社会史、宗教史、文化史について研究しています。

1. 中世ヨーロッパの社会史(紛争史研究、ジェンダー研究)
2. 中世ヨーロッパの宗教史(無名説教師の活動、信徒の宗教的心性)
3. 中世ヨーロッパの文化史(異なる托鉢修道会間の知的交流、写本と印刷本の併存と使用)



説教するベルナルディーノ・ダ・シエナ
シエナ大聖堂美術館



無名説教師の日誌
フォリーニョ市立図書館、写本C. 85

お問い合わせ：奈良女子大学社会連携センター

Tel: 0742-20-3734

Mail: liaison@cc.nara-wu.ac.jp

研究のプロセス・研究事例

1. 中世ヨーロッパの社会史—托鉢修道会の説教は狭義の宗教的内容のみならず、社会生活全般をカバーしました。統治理念や性道德の問題にまで及びます。説教後には、党派争いの和睦がなされ、都市条例で女性の奢侈禁止や同性愛への罰則強化が定められることも稀ではありませんでした。説教史料のみならず、都市の議事録や年代記、公証人文書、各種書簡等の多様な史料を調査し、説教を歴史的な文脈に位置付け分析することで、ジェンダー研究や紛争史研究が等閑視してきた側面に光を当てています。

2. 中世ヨーロッパの宗教史—人気説教師の陰に隠れて実態が不明であった無名説教師の活動にも焦点を当てています。中世末期にイタリアを遍歴説教した無名フランシスコ会説教師の日誌を考察の中心に据え、既存の史料とは異なる角度から説教実践の実態を考察しています。彼が説教作成(修道院)と説教現場(教会・広場)を行き来しながら説教師として成長していく姿を浮かび上がらせ、説教研究の進展に国際的に寄与しています。四半世紀に及ぶ日誌の説教主題・内容分析は、毎年繰り返される説教が信徒の内面に形成した、いわば「心中の暦」の再構成にも貢献しています。

3. 中世ヨーロッパの文化史—近年進展する説教研究においても、ある問題があります。それは単一の修道会の枠内で研究が進められていることである。互いに並び立ち説教していた説教師は、他の修道会の説教師ともネットワークをもっていたのではないのでしょうか。中世から近世へと社会が大きく変化する15-16世紀のヨーロッパの未刊行説教写本(複数の修道会の説教が混在する写本)と初期印刷本の所有・使用状況(異なる修道会の著作の相互参照)の分析から、説教師たちが修道会の垣根を越えて知的交流するなかで、説教が生み出される過程を検討しています。

更新日：2025年1月1日